

苫小牧市総合教育会議議事録

会 議 名	令和4年度 第1回 苫小牧市総合教育会議
日 時	令和4年9月22日 自 14時00分 至 15時05分
場 所	市役所本庁舎5階第2応接室
出 席 者	市 長 岩 倉 博 文 教 育 長 福 原 功 教 育 委 員 佐 藤 郁 子 教 育 委 員 齋 藤 智 子 教 育 委 員 岡 田 秀 樹 教 育 委 員 高 橋 憲 司
欠 席 者	
事 務 局	教 育 部 長 山 口 朋 史 教 育 部 次 長 山 地 吉 明 教 育 部 次 長 齋 藤 貴 志 教 育 部 参 事 池 田 健 人 教 育 部 参 事 桑 島 久 典 学 校 教 育 課 長 神 保 英 士 総 務 企 画 課 長 補 佐 猿 田 秀 一 総 務 企 画 課 主 査 矢 部 妙 子 総 務 企 画 課 主 査 安 藤 龍 慧 総 務 企 画 課 主 事 竹 中 響 紀
協 議 事 項	(1) 苫小牧市立植苗小中学校の義務教育学校化について (2) 苫小牧市教育大綱の改定について
会 議 の 経 過 概 要	別紙のとおり

1 開会の宣言 . . . 14時00分
(岩倉市長) それでは定刻になりましたので、令和4年度第1回苫小牧市総合教育会議を開催いたします。
私にとりましても6月19日改選期を迎えまして、5期目スタートしたばかりであります。先週まで定例会がございまして、市政に臨む基本方針を述べさせていただき、それに対する代表質問終わったばかりであります。その中でも教育行政に関しまして質疑が展開されたところでございます。引き続き、今後ともよろしく願いしたいと思っております。
2 協議事項
(1) 苫小牧市立植苗小中学校の義務教育学校化について
(岩倉市長) 「苫小牧市立植苗小中学校の義務教育学校化」について事務局から説明をお願いします。
(教育部斎藤次長) それでは、私のほうから説明をさせていただきます。資料A4の縦版1枚目をご覧ください。議題1、植苗小中学校の義務教育学校化について、簡単にこれまでの経緯とスケジュール等について説明をさせていただきます。昨年度取りまとめた、苫小牧市立学校規模適正化の現状と課題において、併置校である植苗小学校、植苗中学校の義務教育学校化について検討することと示しました。その後、地域や保護者との協議、校長会や教育委員の皆様との意見交換等を経て、6月に方向性を決定したところでございます。これまで併置校として、小学校、中学校がそれぞれ工夫をしながら連携をしてきたところですが、義務教育学校とすることで正式に組織が一つとなり、教員が一体となって指導に当たることができるようになります。スケジュールとしましては、12月議会において設置条例など、関係条例規則の改正を行

い、令和5年4月に開校、義務教育学校化を予定しているところでございます。

本日は、植苗小中学校の田中校長先生から現在の学校での準備状況などについて、お話を伺いますので、改めて義務教育学校化の期待感を持っていただければと思います。それでは、田中校長、よろしく申し上げます。

(田中植苗小中学校長) 皆様、こんにちは。植苗小中学校長、田中雅子と申します。どうぞよろしくお願いたします。私は、昨年度本校に初めて校長として赴任いたしました。同時に、初めて中学校に勤務いたしました。一般的に植苗小中学校長と申しておりますが、正式には植苗小学校長と植苗中学校長を兼務しております。本校は1つの校舎に何の隔てもなく、小学生と中学生が共に学校生活を送っております。また、1つの職員室に何の隔てもなく、小学校教諭と中学校教諭が共に勤務をしております。これは戦後、昭和22年学校教育法の制定とともに6・3制の義務教育が開始され、本校に中学校が併置されて以来74年間継続され、歴代管理職と歴任教職員の知恵と工夫により小・中連携教育が行われて現在に至ります。小中併置校と言いながらも、現在では義務教育学校に近い学校運営をしておりましたので、このたびの義務教育学校への移行は正式に制度に載せていただいたという意味で、大変ありがたく感謝申し上げます。

それでは、本日は義務教育学校移行へ向けて、現在本校が取り組んでいることを4つに分けてお伝えいたします。

第1章、義務教育学校、植苗小中学校の目指す子供像の確立に向けて。この目指す子供像は、学校経営の根幹をなすとても大切なものであります。学校と家庭、そして地域がともにこのビジョンを共有し、それぞれが役割分担をしながら、目指すところを一つに努力を続けること、それが子供たちの成長にとって大事なことは言うまでもありません。そこで、15歳の目指す子供像の確立に向け、自分たちで考えたビジョンという意識を高めてもらうため、保護者、地域、教職員にアンケートを実施いたしました。設問1、「本校の子供たちのよいところは」との問いに対し、仲よく助け合え、面倒見がよく、明るく素直という意見が9割を占めました。本校の実態として、

<p>縦のつながり、つまり小学生と中学生のつながりが深く、日頃から日常的な触れ合いがあることから、このような結果になったと捉えております。続いて、設問2、「本校の子供たちの課題」は、固定された人間関係であるがゆえ、視野が狭くおとなしい、競争心がなく、踏ん張りが効かないという意見が8割を占めました。どこかのんびりとしていて、人なつっこく、優し過ぎる、これが本校の子供たちの課題でもあり、良さでもあると捉えております。そこから設問3では、「15歳の理想の子供像は」に対し、思いやりのある子と、協働して考え、表現し、行動する子が上位2位を占めました。</p>
<p>第2章、15歳の目指す子供像です。以上のアンケートの結果から、義務教育学校植苗小中学校の15歳の目指す子供像は、次のページの「ともに学び、実践する子」としました。「ともに学び」というのは、学級の仲間とともに、小学生も中学生もともに、家庭も地域もともに学ぶことであり、お互いの違いを認め、相手を受け入れながら、ともに学び合うことでもあります。つまり、多様な他者と協働し、試行錯誤しながら新たな価値を生み出すということです。そのためには、人としての思いやりの心が必要です。実践するというのは、本校の学校教育目標の1つ目、よく考え、進んで実践する子からいただいた言葉でもありますが、生み出された新たな価値は実際に行動に移してみる、つまりみんなで協働して考えたことは実践してみて、うまくいかなかったらやり直せばいい、そして、さらに新たな価値を生み出して、また実践するという意味が込められています。この目指す子供像から本校が育成を目指す資質、能力は2点、協働する力と問題解決力であります。義務教育9年間一貫した方針の下に、この2つの力が育成されたならば、将来子供たちが植苗小中学校を卒業後、予測困難な問題に遭遇しようとも、能動的に学び続けながら生き抜いていけるであろうと考えております。続いて、下の表をご覧ください。これは、植苗小中学校が育成を目指す資質、能力であり、協働する力及び問題解決力をさらに具体的に、9年間でどう育成するのかという表になります。義務教育学校植苗小中学校は、4、3、2制の1から4年生が初等部、5から7年生が中等部、8から9年生が高等部という段階を踏み、</p>

<p>9年間で緩やかにつないで、子供たちを育成してまいります。初等部、中等部、高等部のそれぞれ育成を目指す姿が具体的に描かれてあります。一例を申し上げますと、初等部では、いじめ、意地悪、嫌がらせをしない。中等部になりますと、相手の立場に立ち、思いやりのある行動ができる。さらに高等部になりますと、貢献するというように緩やかに段階を踏んで、子供たちを育成してまいります。これが日常の授業をはじめとする全ての教育活動を通して、本校が育成を目指す子供の具体的な姿になります。</p>
<p>第3章、義務教育学校植苗小中学校の学校体制についてご説明します。下の表をご覧ください。この表が義務教育学校の学校体制になります。6年生の次は7年生、8年生、9年生と呼びます。市内のほかの学校の慣例等から従来と変わらないところは、1年生から6年生までが前期課程、小学校学習指導要領にのっとりた教育課程の編成、通知表の2期生、自由服となっております。一方、7年生から9年生までが後期課程、中学校学習指導要領にのっとりた教育課程の編成、通知表の3期生、制服、ジャージ着用となっております。一方、義務教育学校として特徴的な部分は、資料のほんのりと黄色く色づいた部分になります。1年生からの外国語活動の導入、1年生から一部教科担任制の導入を行い、6年生は主要教科全てを教科担任制に、7年生からは教科担任制の完全実施をいたします。また、従来の児童会と生徒会の一本化を行い、5年生以上の子供たちで児童生徒会を設立します。1年生から4年生の初等部では、4年生をリーダーとした自治組織をつくり、集会活動やレクの企画運営をします。4年生が中心となって、下学年をまとめるという貴重な経験を積ませます。一番特徴的なのは、9年間で縦につなぐ、Uタイムという総合的な学習の時間です。地域の人的、物的資源を生かしながら教科等横断的な教育課程を編成し、目指す子供像に近づきます。植苗に誇りを持ち、植苗に貢献できる、植苗を元気にできるような教育課程を編成したいと考えています。例えば植苗のよさを発見する、発見したよさを地域のお祭りなどで発表する、未来の植苗活性化プランについて地域にプレゼンするなど、内容については、現在教職員で考えているところです。また、それぞれ初等部、中等部、高等部</p>

の最後には、子供たち自身が成長を実感できる儀式的行事を設けます。そして、その成長した姿を後輩たちや保護者に見ていただこうと計画しています。そのほかにも、大きな行事である運動会、学校祭、卒業式等は、1年生から9年生全員で行います。運動会、学校祭ともに児童生徒会が中心となり、地域とともに作り上げる行事にしたいと考えています。具体的には、今年度の運動会で行われた、植苗保育園の子供たちによるよさこいの披露です。このよさこいを見て、その後ろで中学生が共によさこいを踊り出しており、来年度は保育園や1年生から9年生までの子供たち全員、保護者、地域のみinnでよさこいを踊ってみるのも楽しいのではないかと話しておりました。また、学校祭においても、1年生から9年生全員で地域や保護者に向けて、歌声を届けるなど、小中一貫校でしかできない行事を創り出していきたいと思っており、夢は膨らんでいるところです。

第4章、学校の取組。それでは現在、学校の中で取り組んでいることについてご説明します。下の表をご覧ください。これは昨年度の2月、私が全教職員に示した開校までのロードマップになります。全教職員で創った学校であるという意識を高めるため、一人一人の教職員の持ち味を発揮できるような仕事内容を割り振りました。また、これは全て9年間が大前提となりますので、担当の小学校教諭と中学校教諭を組み合わせた部署を多く設定いたしました。時間を見つけては自発的に、小学校教諭と中学校教諭が相談し合う姿が見られるようになり、8月末の職員会議では、各担当から9年間一貫した授業スタイル、学習規律、生活の決まり、ICTで目指す姿、不登校対策等々の全ての計画が出そろいました。まだまだ不十分な部分もありますが、この仕事を通して、小学校教員と中学校教員が共に考え、義務教育学校開校へ新たな価値を生み出すために、植苗小中学校が義務教育学校へ向かう体制が整いつつあると、大変うれしく思っているところです。正直申し上げますと、教職員からの4、3、2制に対する違和感の声は聞こえてきていますが、それは明治5年、学制発布に始まった小学校150年の歴史、昭和22年、学校教育法施行から始まった新制中学校75年の歴史を考えると、当たり前のことでもあります。私にできることは、義務教育学校のよ

<p>さを伝え続けること、そして小学校でもなく、中学校でもなく、義務教育学校という</p>
<p>新しい文化の創造の協力をお願いすることです。</p>
<p>終わりに、義務教育学校の開校がゴールではありません。また、義務教育学校の開</p>
<p>校が目的でもありません。未来の植苗、未来の苦小牧、未来の社会をつくるひとづく</p>
<p>りのため、目指すゴールを1つに、9年間一貫して子供たちを育成する手段として、</p>
<p>本校は義務教育学校へと移行します。子供の育ちと学びの連続性を重視した縦につな</p>
<p>がる教育の要として、小中一貫教育、つまり義務教育学校化を学校、家庭、地域の連</p>
<p>携、協働による横に広がる教育の要として、コミュニティ・スクールの導入が来年度</p>
<p>から始まります。植苗小中学校は未来をつくる子供たちのために、これからも進化を</p>
<p>遂げる学校であり続けたいと考えています。以上で私からの説明を終わります。あり</p>
<p>がとうございました。</p>
<p>(岩倉市長) 今プレゼンしていただきましたが、今日はお一人お一人、委員の皆さん</p>
<p>のご意見等を聞きたいと思います。その前に、先日、文教経済委員会でこの内容に</p>
<p>ついて説明したと伺いましたが、そのとき議員からは何か意見等は出ましたか。事務</p>
<p>局の方お願いします。</p>
<p>(教育部斎藤次長) 先日、文教経済委員会で何人からご質問いただきました。やは</p>
<p>り義務教育学校というもの自体がまだ初めてのものなので、具体的なイメージがつき</p>
<p>にくいということで、基本的なところの質問があり、どういったメリットがあるのか、</p>
<p>何でこのタイミングで義務教育学校なのかというような質問が多くありました。</p>
<p>(岩倉市長) わかりました。では、今年の2月から地域説明会以降の経過について</p>
<p>の説明や、今日の校長先生のプレゼン等を踏まえまして、率直なご意見をいただけれ</p>
<p>ばと思います。佐藤委員からお願いします。</p>
<p>(佐藤委員) よろしくお願いいたします。丁寧なご説明をいただきまして、全く分</p>
<p>からなかった学校の姿が見えてきたような気がいたします。</p>
<p>独自の教育をこれからもいろいろお考えの上で実践していくことかと思いますが、</p>
<p>9年間のカリキュラムの中で、小学校は小学校の要領があり、中学校は中学校で要領</p>

があるとおっしゃっていましたが、ある程度自由に、植苗小中学校の裁量に任されて、カリキュラムをつくることができるのかどうか気になりました。私立の学校では9年間のカリキュラムはよくあることで、6年生が中学校1年生にまたいで授業をするということがありますが、そういうようなこともカリキュラムが決まると、ほかのそれに伴う活動も変わってまいりますので、このところを教えてくださいたいと思いました。

(田中植苗小中学校長) 基本的に、小学校1年生から6年生までは小学校学習指導要領、後期課程の7年生から9年生は中学校の学習指導要領の中に決められた範囲でカリキュラムを設定します。ですので、小と中に入れ替えるというようなことは、現在のところは考えてはおりません。

(佐藤委員) カリキュラムの線引きをしっかりと、小学校6年生ではここまで、ここからは中学校1年生の勉強というのは分かるのですが、教科内での連携や、接続のするところはあるのでしょうか。

(田中植苗小中学校長) そうですね。普通に学んでいると多分つながっていくであろうというふうに思っているのですが、総合的な学習の時間というのは少し学校の裁量でいろいろとつなげることができますので、この部分については柔軟に教育課程を編成して、9年間で目指す子供像に近づけていきたいと考えております。

(佐藤委員) 分かりました。

算数から数学に上がるころの難しさや、それと国語力の読解力の深さなど、小学校6年生から中学校に上がる際に、義務教育として少し重なるところがあると思いますが、そういう部分に対するカリキュラムをお考えなのか、これについて教えてくださいたいです。

(田中植苗小中学校長) 来年度、義務教育学校になりましたら、中学校教員が6年生の授業を行います。そうなりますと、同じ教員が小学校6年生も中学生も教えますので、うまくつなげて教えてくれると思っております。

(佐藤委員) ありがとうございます。

(岩倉市長) 次に岡田委員、お願いします。
(岡田委員) 田中先生から、ただいま本当に理解しやすいご報告、ご説明をいただきましてありがとうございます。目標はどここの地域でも教育の目的は同じですが、それぞれの地域の児童生徒の状況を把握し、それに基づいて、地域に応じた教育、学習を考えると、そういうところをご説明いただき、私としましても、とても納得して聞いておりました。
義務教育学校は9年間という目標で子供たちの教育を目指すということで、これまでの小学校6年間と中学校3年間との分離したものから、9年という大きな期間として見ていくということだと思います。新しい試みでありますので、これからいろいろと試行錯誤をしていくことかと思いますが、よろしくお願ひしたいと思ひます。
(岩倉市長) 次に高橋委員、お願いします。
(高橋委員) 田中先生、お疲れさまでした。よろしくお願ひいたします。
この資料の設問2「本校の子供たちの課題」について、思いやりのある子供たちだけれど、やはり人数がどうしても少ないため、コミュニケーションスキルがなかなか図れないなど、現在の植苗地区の状況はある程度把握させていただきました。今年度のマイナビさんの調査から、知識や専門的なものの修得や学歴よりも、素直さなどコミュニケーションの図れる子たちを新卒採用の中で一番重視しているという答えが出ております。逆に、新しい体制になる中で、できることを増やすこともできるのかなというふうに思っております。まさにここで掲げているICTの教育については、植苗小中学校が全国に先駆けて行っておりますので、義務教育学校との連携を図りながらやり取りをするなど、コミュニケーションの部分だけでも、特に地域性を考えた中で、子供たちが進んで取り組めるような仕組みも、つくっていただけるのではないかと期待をしておりますが、何かお考えがありましたらお願ひいたします。
(田中植苗小中学校長) コミュニケーションスキルを向上させるというところでは、クラスだけを見ますと少ないクラスで7人ぐらい、多いクラスで14人ぐらいと、本当に規模が小さくなっています。ですが、縦に見たときには多様な広がりがあり、同

じ校舎内に小学校1年生から中学校3年生までいるということで、縦のつながり、さらには地域にも広げて、コミュニケーション能力が育つような取組を行いたいと思います。コミュニティ・スクールの取組の中で、実は昨日も子供たちの放課後活動に貢献したいという申出が植苗青年友の会からあり、体育館で子供たちへレクリエーションしてくださったのですが、こういった地域とのつながりの中で、コミュニケーション能力を育むということも考えております。

(高橋委員) ありがとうございます。そもそも近所の付き合いもあるでしょうし、そこに関しては心配しておりませんが、ほかの地域とのつながりを持つことも教育課程が終わった後に必要な能力だと私は思っておりまして、地域性ももちろん大事にしながら、早い段階でつながりを持てる、そんな仕組みをつくってはいかがかなというふうに思ったものですから、今回の学校の形式が変わったことがきっかけになればと思い、質問させていただきました。いろいろな形があるかと思いますが、期待をしていますので、どうぞよろしく願いいたします。

(岩倉市長) 齋藤委員。

(齋藤委員) よろしく申し上げます。今まで植苗小学校、中学校と、組織が分かれた形で学校運営を行っていましたが、実態としては子供たちが共に育っているということで、やっと制度が追いついてきて、よりよい学校運営ができる道筋ができたのかなと感じています。そして、義務教育学校化について自分の中でもイメージはあったのですが、ここまで具体的に開校に向けて細かくプランを練ってくださったなと思って拝見していました。なるほどと思いながら見ており、小さなことなのですが、委員会活動のわかば会や低学年のお子さんたちによる委員会活動など、生徒会活動を行う機会があることはすごいなと思っておりました。先生方は私よりももっとも分かっているらっしゃると思うのですが、幼稚園の年長さんの段階では、園の最年長児としていろいろな役割を与えられて、どの園でも活動されていると思いますが、小学校になった途端に最年少児童となり、せっかく育ってきたものを求められる機会がなくなってしまうのではないかと、私自身は感じておりました。そうはいつでも、学校生活

になると、幼稚園とは違い、求められることも変わってくるかとは思いますが、わかば会のような制度に低学年のお子さんも所属することによって、自分もこの学校の一部の生徒として、自分たちの学校をつくり上げていくんだと自覚することができる機会が与えられるというのは、とてもいいと思いますので、今後の活動に期待しています。

1点質問なのですが、教科担任制や学校の先生の授業のやり方について、低学年のお子さんは学級担任制で、一部教科において担任制ということで、英語の先生などが入る形だと思います。8年生や9年生の高等部については、今までの中学校のスタイルのように全て教科担任制で、中等部については、学級担任制と教科担任制でやっていくということなのですが、先ほどの質問に答えてくださったときに、6年生については中学校の先生が入ってすでに教えているというお話で、これは5年生についても同じ形になっているという捉え方で間違いないでしょうか。

(田中植苗小中学校長) 5年生も同じ形です。もっと詳しく言いますと、1年生と2年生は中学校の音楽の先生が教えてくれます。3年生以上は、体育も中学校の先生が教えてくれます。そして、5年生も同じなのですが、6年生はほぼ全ての教科で中学校の先生が教えるというような、いきなり教科担任制になるのではなく、段階を踏んで少しずつ増やしていきたいと考えています。

(齋藤委員) 分かりました。ありがとうございます。以上です。

(岩倉市長) それでは教育長、お願いします。

(福原教育長) 田中先生、今日はありがとうございました。義務教育学校というものの自体が、小中一貫教育の形態の一つと理解をしていますが、こういった背景があるのか、いわゆる学校教育制度の多様化や、弾力化を推進するためということで、平成28年4月の学校教育法改正で、義務教育学校の設置が可能となったという部分では、非常に歴史は浅いのかなと思って拝見しておりました。そう言いながらも、今回の植苗小中の義務教育学校化については、既に小中併置校であるから設置を行うこと、また田中校長からもありましたが、義務教育学校9年間のスパンでの教育方針というこ

とで、柔軟なカリキュラムが組めるメリットを十分に検討し、これまで準備をされてきていること、一番は、田中校長を始め、先生たちが地域と非常にうまくこれまでやってくれており、移行がスムーズに行えているのではないかと考えています。表現が難しいですが、苫小牧の中では古い地域であり、独特の地域性があるところで、地域の方々は、子供たちを宝物のような扱いをしてきていると感じました。いろいろな地域の中での地域振興策や、子育て世代の方が増えるような提案などをこれまでもされてきているという背景がありますが、そういった中で、今回苫小牧初の義務教育学校化がスタートしますので、市教委としても、しっかりサポートしていきたいというふうに考えております。以上です。

(岩倉市長) 私の公約案件にも入れている義務教育学校なのですが、ディテールを聞いたのはつい数日前でした。名前は分かっていますが、その仕組みのディテールはなかなか理解が難しく、特に議会にはやはり丁寧に説明する必要があると思います。現在の先生で中学校と小学校の資格を両方持っている比率が約3割ということであり、今後の学校経営の中で、少し苦労するところもあるかなと思うと同時に、やはり今こうやって振り返ってみると、言葉が悪いですが、一貫校は一国二制度のような形態として進めていく、それはそれでいろいろと問題もあるのだと思いますが、そういう意味では義務教育学校という形はすっきりとするのではないかと思います。ただ、これがこの日本の長い歴史、教育の歴史の中でどのくらい定着していくのか、あるいは定着するのにどのくらい時間がかかるのかということを感じながら、今は小規模校をターゲットにしていますが、その輪がこれから広がっていくような方向にも行くのではないかとということも感じております。取りあえず現場が一番大変な数年間になるかと思います。

一つだけ校長に聞きます。校長の一番の不安は何ですか。

(田中植苗小中学校長) はい。やはり教育は人なりだと思っておりますので、優秀とまではいかないですが、いかに人材を育てるかということについて、不安に思っております。

(岩倉市長) なるほど、わかりました。
教育委員の皆さん方からの質問、あるいは感想、意見等々を聞いて、参事はどうお考えでしょうか。
(教育部池田参事) やはり最大の教育環境は人なので、植苗小中学校に優秀な先生がたくさん行ってほしいですし、苫小牧全体の教師のレベルも上げながら、偏りなく苫小牧の教育の水準を上げていきたいと思います。
(岩倉市長) 聞き残したこと、あるいは言い残したことや、これだけは言っときたいということはありませんか。
(一同「なし」の声)
(2) 苫小牧市教育大綱の改定について
(岩倉市長) それでは、今日は2つ目の議題であります。苫小牧市教育大綱の改定について、事務局から説明をお願いします。
(教育部長) 教育大綱の改定の方針について、お手元の資料に沿ってご説明をさせていただきます。現在の教育大綱は、2019年から2022年までの期間としており、最後の改定作業を進めるところでございます。教育大綱では、大津市のいじめ事件などを背景に、平成27年4月に地方教育行政組織及び運営に関する法律の大きな改正がございまして、事務方の長である教育長と、委員会の長である教育委員長を合わせた新教育長が設置をされ、責任の所在が明確化されるとともに、市長との連携強化を図るため、総合教育会議の設置、市の教育方針を示す教育大綱の策定が義務づけられたところでございます。資料に記載をしておりますが、教育大綱とは、市としての教育行政に関する方向性を明確化するものでございます。教育の根本的な方針でありまして、総合教育会議で市長と教育委員会が協議、調整をして策定をして、作成された教育大綱の下で、それぞれの所管事務が執行されることとなります。右図は教育

<p>大綱の位置づけですが、本市の最上位計画である苫小牧市総合計画の下で、国の教育振興基本計画や北海道教育推進計画を参酌して、教育大綱が策定されることとなります。その大綱の下に、学校教育と社会教育、生涯学習の各個別の計画がありまして、さらにその下には各校の経営計画があるということになります。</p>
<p>評価資料につきましては、市総合計画の指標としており、学校計画といたしましては、小学校、中学校において充実した教育が受けられること、社会教育、生涯学習としては、生涯を通して様々な学習機会があること、音楽や演劇、美術、伝統芸能などの芸術鑑賞の機会があることとなっております。市民アンケートの結果は、コロナの影響もあるかもしれませんが、いずれも若干の減少となっております。令和9年度の目標値を目指して、この数値を高めていく取組が必要となると考えているところで</p>
<p>素案策定の方針でございますが、先行き不透明で予測が困難な未来に新たな価値を創造する、生涯にわたって自分らしく学ぶ人づくり、これは国の振興計画の趣旨から抜粋した基本の考え方でございます。それを踏まえまして、今回の見直しの方針といたしましては、1番目に、未来の社会をつくるひとづくり、この教育理念については見直す必要はないこと。2番目に、大綱の期間を現在の4年間から、市総合計画や国・道の計画期間に併せて5年間に見直すこと、これは令和5年から令和9年までに</p>
<p>なります。3番目に、基本方針の柱を、現在の5本としているところなのですが、施策の重複を避けるために3本に整理をすること。4番目に、改めて学校現場とともに、しっかり共有して取り組む体制とすることとしてございます。</p>
<p>今後のスケジュールにつきましては、資料に記載のとおりでございますが、本会議の後、社会教育委員会議においても生涯学習に関するご意見を聞くなど調整を図り、11月には修正案をお示しし、必要に応じて再協議を行ってパブリックコメントなどを経て、12月に最終決定したいと考えております。</p>
<p>それでは、続きまして、改定案について池田参事より説明いたします。</p>
<p>(教育部池田参事) 引き続き、私からプリントの2枚目、教育大綱の現在のものと</p>

<p>新しくなるものの対照表を使いまして、新しい教育大綱の具体をご説明させていただきます。</p>
<p>まずは基本理念について、先ほど部長からもありましたとおり、未来の社会をつくるひとづくりを継続して掲げてまいります。次に、教育推進の指標ですけれども、自立、連帯、共生、この3つの精神は踏襲しつつも、それぞれの内容を分かりやすく別々に、そして、今教育に求められている文言を加えながら整理したのが右側でございます。そして、教育方針ですけれども、今回の改定により基本方針の柱を従来の5本から3本、基本施策を18から13として、重なりを避けてスリムに、かつ焦点化をしてシンプルにまとめました。また、基本方針と基本施策の改定案の作成に当たっては、令和5年度以降の北海道が目指す、教育の全体像である北海道教育推進計画案を注視しつつ、苫小牧の教育がこれまで大切にしてきたもの、そしてこれから重視すること、さらには岩倉市長が掲げる市政に臨む基本方針を受けた具体的な取組等を総合的に考慮して、3本の柱、13の施策を考えております。</p>
<p>それでは、13の基本施策について、かいつまんで説明いたします。1つ目の柱は、学校教育の内側の部分を意識した、「社会で生きる学びの推進」としております。具体的には、「1確かな学力の育成」として授業改善、学力向上の検証などを核として取り組みます。「2これからの時代に求められる資質・能力の育成」では、ICTの活用を促進、外国語教育の充実に取り組みます。「3多様な価値を尊重する豊かな心の育成」では、道徳教育の充実、ジェンダー平等、いじめ防止の取組の充実を核としていきます。「4体力向上・健康教育の充実」では、学校における体力、運動能力の向上に加えて、食育の推進に取り組んでまいります。「5特別支援教育の充実」では、連続性のある多様な学びの場の整備、連携を強化してまいります。そういう中で、特別支援教育の充実に取り組みながら、誰一人取り残さない教育の充実を目指してまいります。2つ目の柱、学校を核とした家庭、社会とのコミュニティを重視して、この柱のネーミングを「学校・家庭・地域の思いをつむぐ体制の確立」と掲げました。先週の教育推進企画会議の場では、「学びをつむぐ連携協働の推</p>

進」というふうに表現をされていて、私たちの思いとしては、学校と家庭と社会のそれぞれの役割や学びを子供たちのために紡いでいこうという思いでしたが、その意味がよく分からないというご意見もいただきました。そこで、紡ぐものを、学校、家庭、地域、それぞれ役割が違いますが、それぞれが子供たちの成長を願っている思い、そこに焦点を当てて、思いをつむぐという言葉に整理をしたものでございます。具体的には、「6 学校段階間の連携・接続」では、苫小牧ALL-9の促進ですとか、幼稚園、認定こども園、保育所との小学校の連携に取り組むということ。「7 不登校児童生徒への支援の取組の充実」では、魅力ある学校づくりと不登校への取組の充実、学校、家庭、地域が連携・協働した不登校対策の推進に取り組んで、学校に行くのが楽しいと思える学びの場をつくって、不登校児童生徒に対する学びをしっかりと充実させてまいります。「8 学校と地域の連携・協働の推進」では、コミュニティ・スクール、社会との連携、協働による教育課程の構築。具体的には、ここで様々な機関と連携をして、学校の教育を骨太にしていく。具体的には、SDGs、ふるさと教育、環境教育、防災教育、金融教育に取り組んでまいります。市長公約でもあったものをここでしっかりと具現化して、令和5年に市内に設置される学校運営協議会を核とした思いをつむぐ連携・協働体制を強化してまいりたいと思っています。「9 学びのセーフティネットの構築」では、就学支援の充実、相談機能の拡充に取り組んでまいります。「10 教育環境・学校施設、設備の充実」では、教育環境の整備、教師の労働環境の改善、後継者の育成に取り組んでまいります。3つ目の柱、生涯にわたり学び続ける環境の充実ですが、生涯学習の推進計画を基に3つの施策を準備する予定でございます。今後、生涯学習課と細かなすり合わせを行ってまいりたいと思います。以上が苫小牧市教育大綱の改定案の説明でございます。よろしく申し上げます。

(岩倉市長) それでは、本件につきましても委員の皆さんから、考えや感想、あるいはご質問等を伺いたいと思います。それでは、齋藤委員お願いします。

(齋藤委員) ありがとうございます。それでは、一番手で感想を言わせていただきます。9月14日の教育推進企画会議に出席させていただき、出席するまでは紙で読

むだけだったのでぼんやりした内容で、まだまだこれはどうなのかなという部分があったのですが、例えば「つむぐ体制の確立」を、「学校・家庭・地域の思いをつむぐ体制の確立」というふうに表現を変えていただいている点など、そこで上がった質問等についても改善していただいたことでより分かりやすい表現になったと思います。

そして、私だけではなくほかの委員さんからもお話がありました。これは北海道の教育推進計画をある程度ベースに、苫小牧として、これからどういう教育を目指すべきかに注目してつくられているとのご説明を受け、苫小牧らしさや、苫小牧市として、子供たちにどういうものを求めるか、他市との違いなど、苫小牧だからこその内容について明確にうたってほしいという意見も出ておりました。私自身も、ただこの書かれていることを淡々とやるのではなく、やはり一人一人が、苫小牧の子にどのようなように育ててほしいかを明確に考えて進めてほしいと思います。以上です。

(岩倉市長) ありがとうございます。

次に、高橋委員お願いします。

(高橋委員) ありがとうございます。教育大綱を新しくするというのは、以前から言われていることはもちろん、つながり等についても、時代の経過とともに本当に必要なことだと私は思っております。施策自体が13に絞られたというよりは、絞ったことによって集中的な取組が増えるというふうに思っております。特に13の基本施策の中の4番目、「体力向上・健康教育の充実」について、食育というお話が出ており、先日カレー宣言を市長にもしていただきましたが、他都市も含めて本市自体が、自分のまちを愛することはとても必要なことだと思っております。私自身も今、別の事業の取組をしているところですが、もっともっと苫小牧のことを知って、愛していく、そのために食育は、非常に素晴らしい取組につながると私は思っております。もし今決まっていることがありましたら、ぜひ具体的に教えていただきたいと思っておりますし、新しいものやいろいろな取組を集める情報などについても、何か考えていることがありましたら、教えていただきたいと思っております。

そして、施策の8番、「学校と地域の連携・協働の推進」について、今の子供たち

は、少子化で子供の人数が少なく、我々が子供だった頃とも全然違う環境下にありま
すし、ある意味いい面もあれば、悪い面もあります。いいことだけを取組や教育とし
て教えることは、今これからたくましく生きていく中での正義ではないという観点を
持っておりますので、具体的には申し上げませんが、そういう中では、とにかくいろ
いろな方とのコミュニティーを含めたつながりというものを、本当に重要視する必要
があると考えております。私自身歴代PTAをさせていただいた経験もございますが、
地域と学校のつながり、特に保護者たちとのつながりは、持っている人は持っていま
すが、そうではない方も結構増えています。共働きが多い世代の中で、これからその
推進をしていかなければならないときに、PTAを活用することは非常に有効的だ
と思っております。具体的にどういうことをするのかについては今この場で言及はしま
せんが、ぜひそのような、積極的に動ける方の活用方法も視野に入れて取組を進めら
れたらいいかなと思います。以上です。

(岩倉市長) それでは、今の2点について、池田参事お願いします。

(教育部池田参事) 食育に関する質問がありましたが、今具体的にこれというよう
なことを申し上げられる段階ではありません。ですが、やはり子供たちの食、それも
ふるさとの苦小牧らしい食ということを踏まえた上で、自分の体、または健康、それ
が豊かになっていくような施策をどんどん取り入れていきたいと考えております。

2つ目、つながりという点からのPTAの活用ということで、高橋委員はいろいろ
な場面、形でPTAの活動に尽力されてきた方なので、その大切さや役割の大きさに
ついてのアドバイスだったと思います。やはり親の力や地域の力、これもしっかりと
紡いで、子供たちのために頑張っていきたいなと思っております。

(岩倉市長) それでは、岡田委員お願いいたします。

(岡田委員) 子供たちの教育や学習について、苦小牧市民にも子供たちを育ててい
くというような気持ちを持っていただく、自分の利害で、関心を持つのではなく、公
のことを自らのことにするような、そういう教育も大事なかなと思っておりました。例
えば苦小牧に限らずどこの都市でも考えられますが、選挙の投票率について、自分の

<p>具体的な利害に関わることにしか関心がないというのではなく、そういう公のことに</p>
<p>についても関心を持つ、自分も治めているという自覚、個人をつくり上げる自治の精神、</p>
<p>そういうところが大事かなと思います。やはり人が集まるまちというのは、工場があ</p>
<p>ったり会社があったりするがゆえにそこに人が集まるという面と、そのまちに住み</p>
<p>たい、魅力がある、そこに行きたいと思う人が集まってくるという面があるので、そ</p>
<p>ういうまにするには、市民の人たちが自分たちのまちをつくり上げていくという思</p>
<p>いが、観点としては必要かなと思います。苫小牧市の教育の大綱をつくるという意識</p>
<p>が必要かなと思っております。</p>
<p>(岩倉市長) それでは、佐藤委員お願いします。</p>
<p>(佐藤委員) 18の基本施策をまとめた13の基本施策について、具体的にご説明</p>
<p>いただきましてありがとうございました。よく理解できました。</p>
<p>特に「10教育環境・学校施設・設備の充実」は、多種多様な教育ですとか、学習</p>
<p>の在り方、そして問題解決も含めた項目であるということが分かりました。その13</p>
<p>の施策を通して、志を強く持ち目標を目指す児童生徒が苫小牧っ子として成長してい</p>
<p>く姿をぜひ見たいと思うようになりました。ありがとうございます。</p>
<p>(岩倉市長) 最後に、教育長お願いします。</p>
<p>(福原教育長) 教育大綱の改定ということで、どうしてもこの表現を見ていると、</p>
<p>教育の目標や施策の根本的な方針について、どこの市町村も似たような項目になるの</p>
<p>ではないのかなというのが率直な印象でした。資料の1枚目にある、教育大綱の下に</p>
<p>ある学校教育推進計画ですが、今後5年間で基本理念の未来の社会をつくるひとづく</p>
<p>りについての方向性をいかに示すことができるかは、この具体的な計画の独自性や実</p>
<p>効性が重要になってくると思っています。岡田委員からもありましたが、教育大綱は</p>
<p>市としてつくるものであります。各学校の学校経営方針もあるかとは思いますが、就</p>
<p>任当初から学校現場や市教委に対して、学校の内側しか見ていないのではないかとい</p>
<p>うようなことを訴え続けてきております。いかに、この未来の社会をつくるひとづく</p>
<p>りという基本理念に基づいた、教育大綱、そして推進計画をつくるかが、今後の重要</p>

なポイントだと思っています。以上です。

(岩倉市長) 今後のスケジュール等について、事務局から説明するという事になっていますが、これは大綱改定のスケジュールという意味でしょうか。

(教育部桑島参事) そうです。

(岩倉市長) それでは、スケジュールについて説明をお願いします。

(教育部桑島参事) 本日この素案を出させてきましたので、これ以降も各方面から意見を聞きながら、教育委員さんや市部局からも期間を設けて、何度か意見をお聞きしていきたいと思います。そういったことを経て、12月に再度この総合教育会議を開かせていただいて、最終的に決定をさせていただくようなスケジュールで考えておりますので、よろしくお願いします。

(岩倉市長) それでは、12月の総合教育会議でもう少しまとまった、修正したものが出てくるということでしょうか。

(教育部桑島参事) そうです。

(岩倉市長) 教育について、これまでの延長ではなくて、どういう教育目標があるのか、これからの目標に向かって今何が必要なのかという考え方が必要なのではないかと思うことが1点。もう1点は、13の柱がありますが、これはそれぞれ血管がつながっており、血流をよくしてあげることが、やはり子供たちの日々にとって非常に重要なことだと思います。どこか狭窄箇所があるとしたら、早く処置をしなければならぬ、血の通った教育とは何かということを感じながら、聞いておりましたが、これからの教育を担う大綱でありますので、ぜひ皆さんのいろいろな意見を聞いて、また12月に最終案が出てくるのを楽しみにしておりますので、ぜひ教育部も頑張ってくださいと思います。またそれに対して、次回の会議では教育委員の立場でいろいろな指摘、示唆をいただければと思います。

それでは、今日の議題はこれで終わりますが、その他に何かありますか。

(一同「なし」の声)

3 閉会の宣言 . . . 15時05分